『入菩提行論』における自他平等の思想
――精進章の構成について――

石　田　智　宏
（京　都　大　学）

1. はじめに

『入菩提行論』（Bodhicaryāvatāra）は，シャーンティデーヴァ Śānti-deva（685-763）が六波羅蜜にしたがって著した，菩薩の修行への入門詩である。しかしかれは，六波羅蜜に先だって信仰と発菩提心を中心とした準備段階をおき，あらゆる衆生の安楽と利益に資することを修行の第一とする。つまり，信仰をおこし，菩提心を固めるのは他者のためである，ということを出発点とするのである。かれはその理論的根拠として，たとえば自己の苦，他者の苦というけれども，苦をもつ主体に本来的に自己と他者という区別があるわけではないこと（平等）をあげ，自己と他者のおきかえ（転換）によって自我への執着をはなれるべきことをうたう。

この自他[(1)]の平等性 parātmasamatā と自他の転換 parātmaparivartana という思想は，『入菩提行論』禅定章において84詩頌にわたってくり広げられるが（以下「自他平等の詩群」という），興味深いことに，それらの詩群は敦煌出土の同書の異本では精進章に配置されている[(2)]。菩薩の慈悲のよりどころとしての自他平等性は諸経論に述べられており，注釈家プラジュニャーカラマティも示すように精進・禅定の双方に関係するものであるが[(3)]，それを精進あるいは禅定波羅蜜のどちらに位置づけるかは，仏教の信仰と実践に対する著者の意識をうかがわせるものといえよう。

そこで本稿では『入菩提行論』にみられる自他平等の詩群をとりあげ，現行本と異本とにおけるこの詩群の配置について，とくに精進章のテキスト構成上の問題点に焦点をあてて検討する。

2. テキストと研究史

『入菩提行論』には，サンスクリットの現存する現行本（チベット大蔵経所収の版本に等しい）と，敦煌出土のチベット語訳異本（著者名 アクシャヤマティ *Akṣayamati, Blo gros myi zad pa（＝シャーンティデーヴァ））とがある。現行本は全十章よりなり，第 1 ～ 4 章は菩提心について，第 5 ～ 9 章の各章は順次，六波羅蜜のうち戒以下の五波羅蜜について，第10章は回向について述べている。異本は，現行本の第 2 章と第 3 章をひとつの章とする全九章よりなる。以後こちらを九章本あるいは BSA と呼んで，現行本（BCA）と区別する。本稿で扱う精進章，禅定章は現行本では第 7 章，第 8 章だが，九章本では章番号がそれぞれひとつずつ繰りあがる。

ここで，これまでに明らかになっている両本の関係のうち重要な点をまとめておこう。まず両本の現存するチベット語訳について述べよう。この書は 9 世紀初頭にはじめて翻訳され，それが敦煌出土本に相当する。その後，別系統の写本により翻訳されたものが改訳と編纂をへて現在のチベット大蔵経所収の版本となった。一方インドにおける原本については，九章本がより初期の形に近く，現行本はその後増広をへたものではないかと推測されている。(4)

3. 自他平等の詩群

自他平等の詩群（BCA VIII-90～173/BSA VII-34～85）は自他平等と自他転換の二つの部分に分けられ，現行本の各部はそれぞれ次にあげる VIII-

90および120に始まる。この二つの詩は，それぞれの部分の内容を要約するものでもある。

BCA VIII-90

はじめに注意して次のように自他の平等性を修習せよ。すべての人は等しい苦楽をもつ〔のだから〕己のごとく守られねばならない。[5]

BCA VIII-120（＝BSA VI-50）

自他を速やかに救おうと願う者は，自他の転換という最高の秘密を説くべきである。[6]

一方，九章本にはBCA VIII-90に対応する詩はなく，この詩群はBCA VIII-91に対応するBSA VI-34にはじまる。この詩は両本において一致するので，いまは現行本により内容を確認する。なお，自他転換というトピックを要約するBCA VIII-120は九章本と共通（BSA VI-50）である。

BCA VIII-91（＝BSA VI-34）

手などの部分によって多くの部位からなる身体が，ひとつのものとして保たれるべきであるように，分かれてはいるけれども苦楽を同じくするものであるこの人々の世界は，すべてこれと同じである。[7]

さて九章本の注釈BSAPによると，以上の詩によって導かれる詩群を配置するべき章をめぐって，注釈家の間に論争のあったことがわかる。その部分は斎藤博士により指摘されたが，問題点を端的に示すものなので確認のために提示する。

これに対し他の注釈者たちは，「『自他の平等と』というのと『自他の転換』というこれは，師はこの（精進）章で説いたのであるが，これについては禅定と般若によりもたらされるのだから，〔ここで〕説か

れるのは適当でなく，後の章で説かれるべきである」というが，師を非難する彼らは師の意図を理解していないのだ。[8]

これはBSA VI-34に対する注釈において述べられる。「自他の平等」と「自他の転換」とはそれぞれBCA VIII-90とBCA VIII-120とを指し，「他の注釈者たち」とは現行本に対する注釈家たちである。かれらはBSAPが批判するように，自他平等と自他転換とは禅定（と般若）を主要素とするから禅定章で説明される，という趣旨を述べている。[9] それらは現行本の精進章最終詩（BCA VII-75: 後出）の注釈のあとに唐突に現われるのであるが，現行本の精進章最終詩は自他平等というテーマに関係ないものであるから，その唐突さは自他平等の詩群が本来ここで説かれたという認識があったことを裏づけるものといえる。

ところで以上の議論は，自他平等の詩群が精進章と禅定章のどちらに位置すべきかを述べるにとどまる。両本の自他平等の詩群には共通詩が多いとはいえ，両本それぞれに含まれる詩や各章の文脈における位置づけには違いもある。しかしその点に関しては何も記されない。九章本の注釈であるBSAPが他の注釈者の言葉として，九章本に対応詩のない「自他の平等と」にはじまる現行本90詩を引用しながら，この点について何も語らないことは，注釈者たちにとってこの詩群全体がどの章に帰属するかが問題であって，各詩レベルの相違は問題とされなかったことを示している。つまり，この詩群が二種の異なる伝承（テキスト）における異なる章に位置していることに対して，各々の章の構成は意識されなかったと思われる。

4. 精進章の構成を示す二つの詩

4-1. BCA VII-16/ BSA VI-2

しかし自他平等の詩群は，両本の精進章前半でこの詩群とは別に自他平

等に言及する詩（BCA VII-16, BSA VI-2）と密接に関わっている。その詩は章全体の構成を示すものでもあり，次のようになっている（以下 BCA は梵文のみ和訳する）。

BCA VII-16

aviṣādabalavyūhatātparyātmavidheyatā/
parātmasamatā caiva parātmaparivartanam//

おちこみのないこと，力の配列，専心，自己統御，自他の平等性，自他の転換〔は，懈怠をとり除き，精進の成就のために役立つ〕。

BCAt VII-16

sgyid lug med daṅ dpuṅ tshogs daṅ//
lhur blaṅ bdag ñid dbaṅ byed daṅ//
bdag daṅ gźan du mñam pa daṅ//
bdag daṅ gźan du brje bar gyis//

BSA VI-2

sgyid lug sñom pa'i stobs bcom ste//
bdag ñid dbaṅ du gyurd pa daṅ//
bdag daṅ gźan du mñam pa daṅ//
gźan daṅ bdag du brje bar gyis//

おちこみをうち破る力を征服し，自己統御すること，自他の平等，他我の転換をせよ。

この詩は vīrya を成就するための要項を列挙しているが，現行本で六項目を，九章本で四項目をあげるなかに「自他の平等，自他の転換」がある。この詩は，本章に含まれる以下の詩頌の内容一覧ともいうべきものであり（以下では内容一覧の詩とよぶ），とくに九章本では冒頭第 2 詩であるから章全体を要約する役割をもつ。ここに「自他の平等，自他の転換」が含まれ

ることについて，現行本に対するヴィブーティチャンドラ Vibhūticandra の注釈 BCAVi を見てみよう。

〈16a〉「おちこみ〔のないこと〕」云々というこの偈頌は，他の人の挿入であって，師（Śāntideva）の〔もの〕ではない。〔以下の内容の〕要約詩であるというならば，それなら，怠惰という〔精進の〕対治・軽蔑すべきもの（悪）への愛着・自己軽蔑という〔精進の〕対治[10]はここで〔述べられるのが〕時宜にかなうのに，どうして〔ここで〕説明されないのか？〈16cd〉自他の平等と自〔他〕転換という二つは，こ（の精進）章で〔とりあげるに〕は時宜にかなわないのに，どうしてここに挿入されたのか。禅定の章においてこそ言及されるべきである。[11]

注釈者は「自他の平等，自他の転換」というトピックが精進章に含まれるべきでないとし，第16詩をシャーンティデーヴァ作でないという。BCAVi の注釈態度は基本的に BCAP に近いが，[12] この詩頌の理解については独自性が強く興味深い。彼が注釈する現行本では自他平等の詩群は禅定章に位置しているのであるから，この見解は間接的に「自他の平等，自他の転換」を含む BCA VII-16と自他平等の詩群とが密接に関係していることを示唆するものと考えられる。

4-2. BCA VII-31/ BSA VI-17

次に BCA VII-31と，それに対応する BSA VI-17をとりあげる。

BCA VII-31

chandasthāmaratimuktibalaṃ sattvārthasiddhaye/
chandaṃ duḥkhabhayāt kuryād anuśaṃsāṃś ca bhāvayan//

〔善への〕願望・〔ものごとをやりとおす〕堅固さ・喜び・〔行動が不可

能な場合の一時的な〕断念[13]，〔という四つ〕の力が，衆生の利益を成就するためにある。苦を恐れ，恩恵に思いを巡らせて〔善への〕願望をおこすべきである。

BCAt VII-31

sems can don bya phyir dpuṅ daṅ//
mos brtan dga' daṅ dor ba yin//
mos pa sdug bsṅal 'jigs pa daṅ//
de yi phan yon bsam pas bskyed//

BSA VI-17

sems can don ni 'grub bya na//
mos brtan dga' daṅ rigs dpuṅ[14] bskyed//
mos pa sdug bsṅal 'jigs pa daṅ//
de'i phan yon bsam pas bskyed//

衆生の利益を成就するために，〔善への〕願望・〔ものごとをやりとおす〕堅固さ・喜び・やりかたに叶った正しさ〔という四つ〕の力をおこすべきである。苦を恐れ，そ〔の善なる行い〕による恩恵に思いを巡らせて〔善への〕願望をおこすべきである。

ここでは，両本ともに四力（bala/dpuṅ）と，その第一項である「〔善への〕願望」（chanda/mos）を述べている。これらはBCAではVII-16にあげられる第2項「力の配列」（balavyūha）を詳しく述べたものである。BSAでは，VI-2との対応は明確でないが，BSAPは四力をVI-2の第1項につづくものと理解している[15]。

5. シノプシス

以上に見た二詩にもとづいて精進章の簡単なシノプシスをあげれば次のようになる。章の構成における BCA VII-16の役割と，自他平等の詩群の位置づけを確認したい。

BCAVII（精進章）		BSA VI（精進章）	
1	vīrya の必要性	1	vīrya の必要性
2～15	vīrya の敵		
16	vīrya 成就の内容一覧の詩	2*	vīrya 成就の内容一覧の詩
17～30	(1) aviṣāda	3～16	(1) viṣāda の打破
31	(2) 4 bala:	17*	(2) 4 dpuṅ:
	i. chanda		i. mos pa
32	6 bala[16]		
33～46ab	i. chanda		
46cd～59, **60, 61**	ii. sthāma（dṛḍha）	18, 19*	ii. brtan（dṛḍha）
: 46cd, 49～53, 55～60ab	māna		
47, 48	mukti		
62～65	iii. rati	20～23	iii. dga’
66	iv. mukti（utsarga）	24*	iv. rigs
67～73	(3) tātparya	25*～29*, 31*, 32*	iv. rigs
74	(4) ātmavidheyatā	30*	iv. rigs
75	utsāha（＝vīrya）のまとめ	33*	(2) mos pa etc.（＝4 dpuṅ）のまとめ

BCAVIII（禅定章）			
90,(**91〜119**)	(5) parātmasamatā	34〜49	(3) parātmasamatā
(**120〜173**)	(6) parātmaparivartana	50〜85	(4) parātmaparivartana

この表は，現行本と九章本との詩頌の対応に留意して整理したものである。[17] 左が現行本，右が九章本，太字の数字は九章本に対応詩のある現行本の詩番号を示す。＊を付した九章本の詩は現行本の詩に意味上対応するが，語句などにかなりの相違がある（BCA VII-67〜73と BSA VI-20〜25, 29, 30には順序の交替がある）。無印の詩はほぼ一致する。内容の表記には原則としてサンスクリットをあげ，九章本の一部はチベット語によった。下線は，直前にあげた二詩と，次に検討する詩を示している。(1)〜(4)／(6)と i.〜iv. の分科は上の二詩にもとづいている。

自他平等の詩群に含まれる現行本の計84詩のうち，九章本と対応するのは52の詩（VIII 91-95, 97-99, 101, 114-134, 136-138, 155-166, 168-173）であり，現行本の詩番号を括弧にいれて九章本との対応が一部の詩であることを示した。これらついては＊の有無による両本の対応程度の区別はしていない。

6. 自他平等の詩群が精進章に位置すること

さてここで，九章本において精進章に位置する自他平等の詩群が，現行本では同章に含まれていない点について考察したい。この問題の鍵をにぎるのは，現行本では精進章最終詩となり，九章本では自他平等の詩群の直前に位置する BCA VII-75/ BSA VI-33である。

BCA VII-75

yathāiva tūlakaṃ vāyor gamanāgamane vaśam/
tathotsāhavaśaṃ yāyād ṛddhiś caivaṃ samṛdhyati//

綿が風の去来に従うように，精進に従って進むべし。そのようにして，超自然の能力は増大する。

BCA VII-75t

ji ltar rluṅ ni ’gro ba daṅ//
’oṅ bas śiṅ bal dbaṅ sgyur ba//
de bźin spro bas dbaṅ sgyur te//
de lta na ni ’grub par ’gyur//

BSA VI-33

ci* ltar śiṅ bal ’gro ba daṅ//
’oṅ ba rluṅ gi dbaṅ gyurd pa//
de bźin ’byord pa mos pa yi//
dbaṅ du gyurd pas myur du ’grub//
* ji BSAP.

綿の去来は風の力に従うように，超自然の能力は〔善への〕願望の力に従うことによって速やかに成就される。

ここでは，超自然の能力をもたらすものとして風に喩えられる主題が，現行本では「精進」（utsāha）であるのに対して，九章本では「〔善への〕願望」（mos pa）となっていることが重要である。BCA VII-75とBSA VI-33は両本それぞれに直前までの詩をまとめるが，その範囲は同じではない。まず九章本についてBSAPは次のようにいう。

「綿の〔去来は風の力に従う〕ように」云々と述べた，〈33cd〉1）「〔善への〕願望の力に従うこと」というのは，象徴的にひとつだけ〔が述べられた〕が，同じように 2）ひるまないことの力に従うこと，3）やりかたに叶った正しさの力に従うこと，4）忍耐力に従うこと，5）喜びの力に従うことによって，というように理解されるべきである。[18]

この注釈によれば，BSA VI-33における「〔善への〕願望」とは，注釈中の 1)～5）を代表するものである。1）および 3)～5）は，順序は異な

るがBSA VI-17abの四力にほかならず，それらを「〔善への〕願望」で代表させるやりかたも17-cdと同じである。[19] したがって，このBSA VI-33はBSA VI-17～74の，四力に関する詩群をまとめるものとみなすことができる（シノプシスでは破線の下線で対応を示した。現行本も同様）。この四力をBSA VI-2（内容一覧の詩）の四項の第二項とみなせば，当然つづいて第三・四項である「自他平等の詩群」が述べられることになる。その場合BSA VI-33は明らかに精進章の最終詩とは考えられない。

では現行本ではどうであろうか。精進章の最終詩であることからして章全体をまとめることが予想されるのであり，実際，この詩は章の冒頭詩と次のように呼応する。

BCA VII-1

evaṃ kṣamo bhajed vīryaṃ vīrye bodhir yataḥ sthitā/
na hi vīryaṃ vinā puṇyaṃ yathā vāyuṃ vinā gatiḥ//

このように忍耐した人は精進につとめるべきである。なぜなら菩提は精進に立脚するから。というのも，精進がなければ福徳はない。それは風がなければうごきがないようなものである。

BCA VII-75にみられる「精進」utsāhaは，BCAPに注釈されるように「精進」vīryaのシノニムとして用いられている（BCAP 284.4）。BCA VII-75は「精進」（utsāha＝vīrya）を風にたとえて主題としている点で，同じく「精進」（vīrya）を風にたとえてその必要を説いた冒頭第一詩と符合しており，精進章の最終詩にふさわしくみえる。

ここでいまいちど精進章の構成をふりかえり，BCA VII-75とBSA VI-33が自他平等の詩群の精進章配置においてもつ意味について考察しよう（シノプシス参照）。内容一覧の詩の六項のうち第三・四項はBCA VII-

67～74に対応し，先のBSAPの記述と九章本よりして，第五・六項に対応する自他平等の詩群（BCA VIII-90～173）がBCA VII-75をはさんで連続していた。しかしBCA VII-75が上記の形をとることによって，この詩を最終詩とする精進章としてのまとまりがうまれ，自他平等の詩群が同一の章としての連続性をもつことに違和感が生じた。あるいはむしろ，自他平等の詩群をここに置かず禅定章に移すために，BCA VII-75が改められたのかもしれない。しかしいずれにしても，この詩群は精進章に置かれていたのであり，自他平等・自他転換の項を含む内容一覧の詩と連動しているのであって，この内容一覧詩はヴィブーティチャンドラ説のような後代挿入の可能性はないと見るべきであろう。

一見すると対応をしているかに見えるBCA VII-75とBSA VI-33とは，vīrya / mos paの一語によって，その文脈上の役割をまったく異にするものになった。九章本の構成からは，自他平等の詩群が禅定章におかれたとすればそれは精進章の他の詩頌との整合性が失われて不自然なものとなる。しかし実際には九章本は，自他の平等・転換を述べる内容一覧の詩と自他平等の詩群とが二つの章に分散することなく同一章内に置かれ，現行本のようにテーマが分散せず，構成の整った精進章となっている。

7. おわりに

以上，両本における精進章の構成を見るかぎり，自他平等の詩群は九章本においては精進章に含まれるのが自然であること，現行本においても内容一覧の詩からみれば精進章に含まれるべき必然性があるが，BCA VII-75の存在よりすれば文脈上違和感を伴うことを指摘しえたと思う。

自他平等というトピックは精進・禅定の両波羅蜜と関係するものではあるが，BSAPは「菩薩の精進は，声聞の精進のように自分一人の制御で

はなく，自他平等性をもたらすのですぐれている，というのが師アクシャヤマティの意図であり，それゆえこの詩群が精進章に述べられた」という趣旨を述べている。[20]『入菩提行論』において発菩提心の目的が衆生の利益に向かうものであったことを考えるとき，この注釈はシャーンティデーヴァの信仰の出発点をよく伝えているといえるのではないだろうか。

テキストと略号

BCA: Bodhicaryāvatāra (Śāntideva). L. de La Vallée Poussin (ed.), Calcutta 1901–1914.

BCAK: Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i legs par sbyar ba (Kalyāṇadeva). D 3874 (Śa), P5275(Śa).

BCAP: Bodhicaryāvatārapañjikā (Prajñākaramati). See BCA.

BCAt: Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa (Śāntideva). D3871(La), P5272(La).

BCAVa: Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i dka' 'grel (Vairocana-rakṣita). D3875B(Śa), P5277(Śa).

BCAVi: Byaṅ chub kyi spyod pa la 'jug pa'i dgoṅs pa'i 'grel pa khyad par gsal byed ces bya ba (Vibhūicandra). D3880(Śa), P5282(Śa).

BSA: Byaṅ cub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa (Akṣayamati (=Śāntideva)). Stein Tibetan No. 628. in Saito (2000)

BSAP: Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i rnam par bśad pa'i dka' 'grel. D3873 (La), P5274 (La).

D: Tibetan Tripiṭaka, Derge Edition.

P: Tibetan Tripiṭaka, Peking Edition.

Saito (2000): Akira Saito, A Study of the Dūn-huáng Recension of the Bodhisattvacaryāvatāra, A Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Tsu 2000.

学会発表においては，自他平等の詩群に含まれる『学処要集』*Śikṣāsamuccaya* (ŚS)との共通詩にも触れたが，BCA/BSA と ŚS との関係については未解決の問題も多い。質疑において両者に関する新見解を披露して下さった斎藤明博士による研究成果の発表が予定されているので，本稿では触れないことにした。斎藤「*Bodhi*(*sattva*)*caryāvatāra* と *Śikṣāsamuccaya*」『印度哲学仏教学』16号掲載予定。(追記：平成13年10月刊行)

注

(1)　この日本語の「自」と「他」の順は，サンスクリットではparātma- と出，対応するチベット語ではbdag daṅ gźanと出ることが多い。本稿では，特殊は場合を除いて，すべて「自他」に統一した。

(2)　斎藤明（1986）「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』pp.79-109（とくにpp.98-100）春秋社；同（1996）「『入菩薩行論解説細疏』のシャーンティデーヴァ理解」『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』pp.594(355)-582(367)（とくにpp. 593-591），春秋社。

(3)　BCAP 284. 7-8.

(4)　チベット語訳の経緯については，斎藤明（1986）；同（1994）「『入菩薩行論』の謎と諸問題：現行本第9「智恵の完成（般若波羅蜜）章」を中心として」東方学87, pp.（147)-(136); 同(1996); A. Saito（1993），*A Study of Akṣayamati*（＝*Śāntideva*)*'s Bodhisattvacaryāvatāra as Found in the Tibetan Manuscripts from Tun-huang,* Grant-in-Aid for Scientific Research（C），Tsuを参照。現行本と九章本の関係については上記斎藤論文のほか，以下の拙稿がある。石田（1993）「*Bodhicaryāvatāra*における波羅提木叉と懺悔法―改編と改訳の証跡―」『仏教史学研究』36-2, pp.（1)-(27); C. Ishida（1988）"Some New Remarks on the *Bodhicaryāvatāra* Chapter V," *Journal of Indian and Buddhist Studies* 37-1, pp.（479)-(476); do.（2001）"Notes on the Deśanā-ritual in the *Bodhicaryāvatāra*: Evidence of its Revision,"『田賀龍彦博士古希記念論集　仏教思想仏教史論集』pp.199(776)-216(759)，山喜房仏書林。以上のほか異本に関するこれまでの研究はSaito（2000），Referencesにまとめられている。

(5)　parātmasamatām ādau bhāvayed evam ādarāt/
samaduḥkhasukhāḥ sarve pālanīyā mayātmavat//

(6)　ātmānaṃ ca parāṃś caiva yaḥ śīghraṃ trātum icchati//
sa caret paramaṃ guhyaṃ parātmaparivartanam//

(7)　hastādibhedena bahuprakāraḥ kāyo yathaikaḥ paripālanīyaḥ/
tathā jagad bhinnam abhinnaduḥkhasukhātmakaṃ sarvam idaṃ tathaiva//

(8)　'dir 'grel ba byed pa gźan dag na re/ bdag daṅ gźan du mñam pa daṅ źes bya ba daṅ/ bdag daṅ gźan du brje ba 'di ni/ slob dpon gyis skabs 'dir bśad kyaṅ 'dir ni bsam gtan daṅ śes rab kyis bsdus pa yin pa'i phyir bśad pa'i rigs pa ma yin pas/ le'u 'og mar bśad par bya'o źes slob dpon la skyon

rjod par byed ba dag gis ni/slob dpon gyi dgoṅs pa ma śes par mthoṅ ste/（BSAP: P375a2-4; D331a2-3）

⑼ BCAP 284. 7-8; BCAK: D3874 54a2-3, P5275 64b 4-5; BCAVa: D3875B 127b 3-4, P5277 149b 7-8. 斎藤明（1996）: p. 592参照。

⑽ BCA VII-2において述べられる vīrya の敵をさす。

⑾ 〈16a〉 sgyid lug pa la sogs pa'i tshigs bcad 'di gźan gyis*1 bcug pa yin gyi slob dpon gyi ma yin/ sdom tshig yin źe na/ 'o na le lo'i gñen po daṅ/ ṅan la chags pa daṅ/ bdag ñid brñas pa'i gñen po skabs su bab pa ci ste mi 'chad/ 〈16cd〉 bdag daṅ gźan mñam pa daṅ/ bdag daṅ brje ba gñis 'dir skabs su ma*2 bab pa ci ste 'dir bcug// bsam gtan gyi le'u kho nar brjod par bya ba yin no//（BCAVi: D237b5-7; P283b1-3）*1 gyi P. *2 ma omit P.

⑿ 江島恵教「入菩提行論の注釈文献について」『印度学仏教学研究』14-2, pp.644-648, 1996. 3.

⒀ 和訳は適宜 BCAP261. 1-3 による。

⒁ BSAP はこの四力の説明にあたって，1）go cha（甲冑〔に身をかためた〕），2）sbyor ba（修行にはげむ（加行）），3）mi ldog pa（不退転），4）chog par mi 'dzin pa（（わずかの成功で）満足することのない（不喜足））という四精進をあげ，これらに四力をあてて説明する（BSAP: P372b8-373a4; D329a5-329b1）。この四精進は，Mahāyānasūtrālaṃkāra（MSA）XVI-68にみられる分類：1） saṃnāhavīryam（申冑に身をかためた精進），2）prayogavīryaṃ vidhivatprahitam（やりかたに叶った修行にはげむ精進），3）alīnam akṣobhyam atuṣṭivīryam（ひるまず，動揺することなく（不退転），満足することなき（不喜足）精進），あるいはMahāyānasaṃgraha（MS）の分類：1）go cha, 2）sbyor ba, 3）mi źum źiṅ mi 'khrugs pa la chog par mi 'dzin pa（ひるまず，動揺することなく（不退転），満足することなき（不喜足））などの影響を想定することができようか。MSA: ed. S. Levi, Paris 1907, vol 1, p. 114; MS: 長尾雅人『摂大乗論 和訳と注解 下』講談社 1987: p.（77）.

⒂ BSAP: P 372b8 - 373a4; D 329a5 - 329b1.

⒃ 6 bala とは，1. chanda（〔善への〕願望）2. māna（自信）3. rati（喜び）4. tyāga（断念）5. tātparya（専心）6. vaśitā（制御）である。第31詩で4 bala を挙げた直後の重複する詩に不統一を感じたフィノーは，早くに BCA VII-32を後代の挿入とみなした。L. Finot, *La Marche à la lumière: Bodhicaryāvatāra*, Paris 1920: n. 48. 一方 Crosby and Skilton は，BCA VII-31を以下第66詩までの要約とする BCAP の解釈に疑問を呈し，次のように理解

する。すなわち，BCA VII-31はBCA VII-2に列挙される「vīryaの敵に向かうもの」とみなし，BCA VII-32を「vīryaに努める方法」と理解する。その理由として，①VII-32の6項が本章の以下の内容に完全に一致するのに対してBCA VII-31はそうではないことをあげ，その例として，本章の以下の部分に②VII-31の2. sthāmaに対応する詩がないこと，③VII-46(cd)以下のトピックであるmānaはVII-32にしかないこと，④VII-67～75はVII-32の5. tātparyaと6. vaśitāにこそ対応するが，この二項はVII-31にないことをあげる。この解釈は，自他平等の詩群を含まない現行本の第16，31，32詩をこのままの形で矛盾なく説明しようとするものであるが，九章本を参照することのできる今，再考の余地があろう。すなわち，①は，VII-31をVII-16所掲の6項の 2. balavyūhaの細分類と理解すればよい。④については，VII-67～74はVII-16の 3. tātparya, 4. ātmavidheyatāに対応するとみればよい（内容は同じ）。②③については，BCAPのようにmānaをsthāmaの概念下に理解すればよいと思われるが，さらにsthāmaに対応する詩としてはVII-54, 60cd, 61がある。またmānaを述べる詩の大半は九章本に存在しないから，現行本への増広時にmānaを述べる詩とVII-32とがともに挿入された可能性を考えることができるのではないだろうか。Crosby and Skilton (1996): Kate Crosby and Andrew Skilton (tr. with Intro. and Notes), *The Bodhicaryāvatāra,* Oxford/New York 1996: pp.64-65.

⑰ 主として，本章をBCA VII-16, 31にしたがって解説するBCAPとBSAPとにより，また以下に掲げる現代語訳の分節・要約をも参考にした。L. de la Vallée Poussin, *Bodhicaryāvatāra: Introduction a la pratique des futurs bouddhas, Poème de Śāntideva,* Paris 1907, p. 71; Steinkellner (1981): E. Steinkellner, *Śāntideva: Eintritt in das Leben zur Erleuchtung* (*Bodhicaryāvatāra*), Düsseldorf 1981.

⑱ 〈33a〉 ji ltar śiṅ bal źes bya ba la sogs *⁻pa smos⁻* te/ 〈33cd〉 1) mos pa'i dbaṅ du gyur pa źes bya ba ni mtshon pa tsam du zad kyi/de bźin du 2) mi źum pa'i dbaṅ du gyur pa daṅ/ 3) rigs pa'i dbaṅ du gyur pa daṅ/ 4) brtan pa'i dbaṅ du gyur pa daṅ/ 5) dga' ba'i dbaṅ du gyur pas źes bya ba de ltar yaṅ śes par bya'o//(BSAP: P5274 374b5-6; D3873 330b5-6) *⁻ ⁻*om. D.

⑲ 2)「ひるまないこと」については前註⑯のMSA, MS参照。

⑳ BSAP: P5274 374b6-375a2; D3873 330b6-331a2.